

特集 比較研究の地平／第三九回大会公開講演

比較民話学のすすめ

— 柳田國男のグリム研究再考 —

高木 昌史

序

日本の民俗学を樹立するに際して、柳田國男は口承文芸の重要性にいち早く着目した。中でも彼が集中的に研究したのは、グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen (以下KHMと略記)である。¹⁾ 柳田は大正十(一九二二)年から十二(一九二三)年にかけて—途中一度帰国—、国際連盟委任統治委員会委員としてジュネーヴに赴任したとき、ヨーロッパ各地を旅行し、民族学・民俗学関係の洋書を多数購入した。²⁾ ドイツではJ・ボルテ／G・ポリフカのKHM注解、今日なお重要な文献を入手している。³⁾ 帰国後、約十年間それら洋書文献(英語・独語・仏語／現在、成城大学民俗学研究所所蔵)の読解に専念、その成果を次々に発表した。

本稿では、初めに柳田のKHM研究の現場を覗き、彼の口承文芸学が、元来、いかにインターナショナルな性格のもので

あったかをあらためて確認したい。具体例として、彼がKHMの中でも特に注目した昔話の一つ、KHM五四a「ハンスばか」Hans Dumm⁴⁾を取り上げる。初版のみに収録され以後の版ではカットされたこの物語に彼は何故に関心を抱いたのか、どのようにそれを解読したのか。その経緯を分析する過程で浮かび上がってくるのは、実は、柳田の比較民話学への志向である。

一 洋書文献への柳田の書き込み

初めに、柳田國男の仕事現場を少し覗いてみたい。柳田文庫の中から二点ご紹介する。資料1はヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリフカ編集『グリム兄弟の「子供と家庭の童話集」注解』(第四卷)J. Bolte/G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Bd. 4 (以下B/Pと略記)、資料2はボルテとルッツ・マッケンゼン編『ドイツ昔話辞典』(第一巻)J. Bolte/L. Mackensen: Handwörterbuch des

deutschen Märchens, Bd. I (以下 H P M と略記) からのコピーである。⁶⁾

資料1は、B/P第四巻、「昔話の歴史」第五章「十六世紀から十八世紀の昔話」一イタリア、バジレの『ペンタメローネ』第一日第三話「ペルヴォント」Pervontoの一節である(一九三頁)。本文はグリムがイタリア語から独語訳したものである。(ペルヴォントが現れると)、「二人の子供が彼をめぐって走って行き」*laufen die beiden Kraben auf ihn*と(待女の幾人かは彼女を)「樽に入れて」*in die Tonne*(あげた)の部分にアンダーラインが引かれ、その右欄外に「ウツホ舟」とメモが書き込まれている。⁷⁾

資料2はボルテ／マッケンゼン編『ドイツ昔話辞典』第一巻「舟への遺棄」*Aussetzung im Boot*の項(一五五頁)である。項目そのものにアンダーラインが施され、左側の欄外に「ウツホ舟」のメモが見える。下線およびメモ(「ウツホ舟」)は明らかに柳田のものである。同頁には、「モーセの物語」、「ダナエ」そしてバジレの『ペンタメローネ』第一日第三話が「舟への遺棄」の代表例であることが記されている。⁸⁾

柳田が「うつほ舟」のテーマを研究するに際して、ドイツ語文献からいかに貴重な情報を得ていたかが具に窺われる。彼の昔話研究は最初から国際比較を視野に入れている。

二 柳田のジュネーヴ滞在前後

本題(「うつほ舟」)に入る前に、昔話の比較研究の歴史を簡単に振り返り、ヨーロッパと日本の口承文芸学の接点を確認しておきたい。

柳田がジュネーヴに滞在していた当時、ヨーロッパではグリムが没してほぼ半世紀あまりが経過し、口承文芸学が大きく花開き始めていた。グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』は、初版第一巻(一八二二年)と第二巻(一八一五年)が刊行されて以来、主に弟ヴィルヘルムによって改稿が重ねられ、一八五七年に決定版(第七版)が発表されたが、KHMには、実は、「原注」*Originalanmerkungen*が付けられている。初版二巻のそれぞれ巻末、第二版(一八一九年)第三巻(一八二二年)、第六版(一八五〇年)第三巻(一八五六年)⁹⁾がそれだ。中でも一八五六年の「原注」には、KHMの「個々の物語への注釈」のみならず、「証言集」と詳細な「文献」が収録され、例えば、「文献」中のバジレやシャルル・ペローの項には、KHMと『ペンタメローネ』、KHMと『ペロー童話集』の類話が対照表のかたちで整理されている。¹⁰⁾以後、「原注」は昔話の比較研究の基点となつてゆく。

その先鞭をつけたのはフィンランド学派である。一九〇八年、『昔話の比較研究』*Vergleichende Märchenforschungen*を

schiebt, aber man entdeckt nichts. Zu einem zweiten Fest werden Bürger und Kaufleute eingeladen, aber wieder umsonst. Endlich noch ein Fest, wozu alle geringen und armen Leute berufen werden; auch Pervonto kommt dahin, und wie er sich blicken läßt, laufen die beiden Knaben auf ihn zu und Herzen ihn. Wie der König das sieht, reißt er sich vor Zorn den Bart aus und läßt den Pervonto und seine Tochter und die zwei Kinder aufs Meer aussetzen. Einige ihrer Jungfrauen geben ihr aus Mitleiden ein Fäßchen Rosinen und trockene Feigen in die Tonne, welche zugeschlagen wird und fortschwimmt, wie sie der Wind treibt. Vastolla weint und jammert: 'Sag mir an, Grausamer, wie hast du mich nur bezaubert und ins Unglück gebracht?' Er antwortet: 'Gib mir Feigen und Rosinen, so will ich dir dienen!'. Sie

ウ
ボ
舟

S 331, Aussetzung im Boot. — Beispiele für A.
Q 466 in einem Boot sind weitverbreitet¹⁾ und
gehen wahrscheinlich nicht auf eine ein-
zige Wurzel zurück. Sie lassen sich zwang-
los einteilen nach Zweck und Alter des
Opfers.

ウ
ボ
舟

1. Ein Kind wird in Geschichten häufig ausgesetzt, wenn es unerwünscht ist, oder wenn nach einer Prophezeiung den Eltern später Gefahr von ihm droht. Diese Form ist so alt wie die Keilschrift-erzählung vom Leben Sargons (668—626 v. C.). Die findet sich wieder in den Reisen des Fa-hien (319—414 n. C.) und danach allgemein in javanischen und hindostanischen Erzählungen²⁾. Cosquin ist geneigt, in diesen Fällen eine gegenseitige Verwandtschaft anzunehmen. Viele von ihnen zeichnet der besondere Zug aus, daß das schwimmende Kästchen von einem Lichtschein umgeben ist. Eine Streitfrage ist es, ob die Geschichte von Moses (2. Mose 2, 3—10) damit verwandt ist³⁾. Zu erwähnen ist das Vorkommen dieses Zuges in der Geschichte von Romulus und Remus, Judas, Danae, Basile Pentam. I, 3 und anderswo. Die zwei zuletzt

刊
行
し
た
ア
ン
テ
ィ
・
ア
ール
ネ
A.
A.
arne
は、
(¹⁴)
二
年
後、
『
昔
話
タ
イ
プ
の
目
録』
Ver
zeich
nis
der
Mär
chent
ypen
(¹⁵)
(
一
九
一
〇
年)

を
作
成、
続
い
て、
ア
メ
リ
カ
の
民
俗
学
者
ス
テ
ィ
ス
・
ト
ン
プ
ソ
ン
S.
Thom
pson
が
『
昔
話
の
タ
イ
プ』
The
Types
of
the
Folk
tale
(¹⁶)
(
一
九
二
八
年)
を
発
表、
一
九
六
一
年
に
は
増
補
版
が
刊
行
さ
れ、
そ
れ
か
ら
以
後、
い
わ
ゆる
A
T
(
ア
ール
ネ
／
ト
ン
プ
ソ
ン)
が
昔
話
の
国
際
比
較
の
基
準
と
な
る。
そ
の
間、
一
九
二
六
年
に
は
ア
ール
ネ
と
並
ぶ
フ
ィ
ン
ラ
ン
ド
学
派
の
代
表
者
カ
ール
レ
・
ク
ロ
ー
ン
K.
Krohn
が
『
民
俗
学
方
法
論』
Die
folkloristische
Arbeitsmethode
を
発
表、
柳
田
は
そ
の
原
書
(
独
語)
を、
ア
ン
ダ
ー
ライ
ン
を
引
き
つ
つ
徹
底
的
に
研

究する¹⁸⁾。

フィンランド学派と同じ頃、ドイツでは、グリム兄弟以来、口承文芸学の分野で重要な文献が刊行された。ヨハネス・ポルテ J. Bolte と チェコの民俗学者ゲオルク・ポリフカ G. Polivka が共同編集した前述『グリム兄弟「子供と家庭の童話集」注解』全五巻がそれである。一九一三年に第一巻、一九一五年に第二巻、そして一九一八年に第三巻が刊行され、柳田はジュネーヴ時代それらを購入し、帰国後、一九三〇年刊行の第四巻と一九三二年刊行の第五巻も入手している¹⁹⁾。B/P は、第一巻から第三巻までが KHM の個々の昔話の「注解」、第四・五巻は昔話の歴史・収集を全世界的な視野でまとめた今日なお最も重要な文献である。柳田は特に第五巻を、鉛筆で下線を引きながら研究している²⁰⁾。

B/P と並んで注目される文献は、J・ポルテとルッツ・マツケンゼン編集の『ドイツ昔話辞典』²¹⁾である。一九三三年に第一巻、一九四〇年に第二巻が刊行されたこの『辞典』は、残念ながら、第二次世界大戦の混乱のために、G の項までで頓挫している。柳田文庫にはこの二巻が収蔵されている。所々にメモやアンダーラインが記され、柳田の研究ぶりが窺われる。B/P 同様、この『辞典』も柳田の関心の所在を垣間見る上にきわめて貴重な典拠を示してくれる。

滞欧時代から第二次世界大戦終了の頃にかけて、柳田は口承文芸に関する彼の著作を次々と世に問うている。『郷土生活の研

究法』(一九三五年)、『昔話と文学』(一九三八年)、『昔話覚書』(一九四三年)、『口承文芸史考』(一九四七年)等である。口承文芸学が一斉に花咲いた第一次世界大戦前後のヨーロッパに二度滞在した柳田は、現場の息吹を洋書文献共々日本に持ち帰り、約十年間研究を続け、日本の民俗学を樹立したのである²²⁾。

三 論文「うつぼ舟の王女」

以上、口承文芸学の流れを概観したが、ここから柳田國男のグリム研究を具体的に再検討することにした。今回は KHM 五四 a 「ハンスばか」 Hans Dumm を取り上げる。

柳田は「一目小僧その他」(一九三四年)、『昔話と文学』、『妹の力』(一九四〇年)、『口承文芸史考』、さらに『辞書解説原稿』等でしばしば「ハンスばか」に言及している²³⁾。彼が強い関心を寄せた〈流され王〉(貴種流離譚)のモチーフをそれが含んでいるからと思われる。粗筋は次のようである。

昔、王様が一人っ子の姫を相手に幸せに暮らしていた。ある時、姫は何の前触れもなく子供を一人生んだ。誰がその子の父親なのか分からず、久しく途方に暮れた王様は姫に、子供を連れて教会に行くように命じ、その子にレモンを持たせ手渡した相手を父親Ⅱ姫の婿ということにした。結局、見栄えがしない(ハンスばか)と呼ばれていた男に子供はレモン

を渡した。王様は怒って姫と子供とハンスばかを大きな樽に入れて海へ流してしまった。姫に罵倒されて、ハンスは姫に子供が出来るように祈ったことがあると告白した。姫がハンスに食べ物、立派な船、城を次々に望むとそれが叶い、最後にハンスばかりは自身が若い知恵のある王子になることを願う。その通りになり、姫は大喜びし、二人は城で楽しく暮らした(以下略)⁽²⁴⁾。

KHM初版(一八二二年刊)に収録された右の物語を、グリム兄弟はユグノー出身のハッセンプフルーク家で採集したが、フランス版の内容との一致点が明白なこともあって、第二版からは削除した⁽²⁵⁾。柳田文庫所蔵のレクラム版KHM三巻本は第七版のテキストなので、「ハンスばか」は収録されていない。柳田は恐らく、初版の全文を採録した前述ボルテ／ポリファカのKHM注解(B/P)第一巻からこの昔話を知ったと思われる⁽²⁶⁾。

「ハンスばか」の原話は、バロック期イタリアの作家G・バジーレの昔話集『ペンタメローネ』第一日第三話「ベルヴォント」Pevonioに見出されるが、B/P第四巻にはグリムによるその独語訳が掲載されている⁽²⁸⁾。

柳田は昭和六「一九三二」七月、『アサヒグラフ』に初めて掲載された論文「うつぼ舟の王女」(『昔話と文学』所収)の中で、『ペンタメローネ』の「ベルヴォント」を中心に、「ハンスばか」を含めた(うつぼ舟)の物語を総合的に分析している。結語部

分て柳田は八つのポイントを挙げる。1 微力な青年でも霊力の助けがあれば出世すること。英雄は初めそのような姿で隠れている。2 非凡な「如意の力」。3 処女の受胎。4 うつぼ舟に入られて海に流すこと(大隅の正八幡、唐や朝鮮の古代王国の創始者の奇瑞)。5 小童の英明靈智。6 父発見の方法(播磨風土記)。7 幸運の主が妻に教えられるまで己の価値に気づかないこと。8 僅かな人間の知恵で此の世の出来事を批評してはならないという教訓⁽³⁰⁾。

イタリア(「ベルヴォント」とドイツ(「ハンスばか」)の昔話を、日本と中国と朝鮮のそれと対比しながら考察する柳田の視点は、口承文芸の東西比較の範例を示している。柳田は『妹の力』所収の「うつぼ舟の話」(大正十五「一九二六」年初出)の中で、日本の貴種流離譚を詳述しているが、五年後の右の「うつぼ舟の王女」(『昔話と文学』)では、(うつぼ舟)タイプの東西比較を試みるのである。論文の最後に柳田はこう語る。

「それにまた国限りの孤立した発達があつて、比較は何よりも意味の多いことになった。西洋の説話研究者たちが、素材のなお豊かなる日本の口碑蒐集に、深い注意を払っているのは道理あることである。」⁽³²⁾

洋書文献を約十年間集中的に研究して、口承文芸の比較研究の確かな基盤を築いた柳田ならではの発言である。西洋文化の

受容のみならず、この分野ではわが国から発信すべきものも多いことに彼は喚起を促している。国際交流の勧めである。

四 モティーフ分析（異常誕生／笑わない王女／舟への遺棄）

「うつぼ舟の王女」論の中で柳田は物語の要点を八項目にまとめていたが、バジールの「ペルヴォント」とグリム童話「ハンスバカ」には、実際、昔話に典型的なモティーフが数多く含まれている。アールネ／トンプソンの『昔話のタイプ』はこれをA T六七五「怠け者の若者」The Lazy Boyに分類している。³³『昔話百科事典』（EM）によると、このタイプは東アジア、インド、近東および全ヨーロッパに広く分布し、類話が一五〇以上記録されている。³⁴本稿では三つのモティーフを取り上げる。

1 「笑わない王女」と「異常誕生」

バジール『ペンタメローネ』では、主人公ペルヴォントは〈怠け者〉で〈大ばか〉であるが、K H M五四 a「ハンスバカ」では〈怠け者〉の要素が欠落し、主人公の容貌の醜さが強調されている。しかし両者は願っただけで王女を妊娠させる。

ペルヴォントは母親に命じられて森に薪を採りに行ったとき、直射日光を浴びて三人の若者が眠っている姿を見て気の毒に思い、樫の枝を切って彼らに日よけを作ってあげる。目を覚

ました妖精の息子たちはお礼に願えば何でも叶う（呪文）を主人公に教える。呪文を教わったペルヴォントは大量の薪を前に、それが自分を馬みたいに運んでくれたなら、と願う。すると薪の束は彼を乗せたまま名馬のように走りだし、その光景を宮殿の窓から眺めた姫は思わず笑ってしまふ。事情を知らない主人公は王女にからかわれたと思いい、自分の子を孕んでしまえ、と呪う。

「ハンスバカ」には王女の笑いのエピソードは欠落している。物語の途中、海を漂う樽の中で、姫に（自分の）子供が出来るように祈ったことがあると主人公が告白する場面が挿入されているだけである。

以上は昔話のモティーフとして有名な「笑わない王女」と「異常誕生（懐胎）」の典型的な例である。EM「笑い」Lachenの項（第八巻）によると、「悲しげな／気難しい／高慢な王女」を笑わせるモティーフは、一般に、「求婚の試練」に用いられる。その場合、「単純な若者」が、その無邪気さ故に、それに成功する。³⁵

「笑い」には心を解放してくれる作用がある。様々な原因で緊張あるいは硬直した精神は、時として「笑い」によって自由になる。「笑い」は人間社会にとって貴重である。昔話の「求婚の試練」では、男性が女性を笑わせることによって、後者の緊張が解かれ（武装解除）、彼女の心は従順になる（「征服される」）。ただし、失敗すれば死刑が待っている。

ちなみに、旧ソ連の民俗学者V・プロップはフォークロアの観点から「笑わない王女の昔話」を分析し、沈黙Ⅱ死Ⅰ笑いⅡ生の図式を、KH M九「十二人兄弟」を例に導き出し、「生命を呼び起こす能力」が「笑い」に内在していることを指摘する。³⁶⁾

「ペルヴォント」の場合、薪の束に馬乗りになった若者を偶然窓から見て王女が笑うのだが、それを愚弄と勘違いした主人公は怒りのあまり「呪文」によって王女を妊娠させる。一見、「求婚の試練」ではないが、偶然と奇跡（呪文）が介在して、結果的に、王女と主人公は結ばれる。王女にとって処女懐胎は本意にちがいない。しかし彼女は、もしかしたら、ペルヴォントによって笑わされた瞬間、すでに笑いⅡ生命を宿す態勢が出来ていたのではあるまいか。

一方、E M「不思議な妊娠」Wunderbare Empfängnis（第三卷）の項によれば、「異常誕生（懐胎）」conceptio magica（魔法の妊娠）は、神話、英雄伝説等で世界中に広く知られたモチーフである。ドイツの民俗学者K・ランケは「水」、「魚」、「林檎」等の摂取をその要因として挙げ、プロップは特に「果実からの誕生」に注目し、様々な民族において特定の果物が妊娠に有効とされる民間信仰について詳しく言及している（『魔法昔話の研究』斉藤君子訳³⁸⁾）。マレー人のココナッツ、ハワイ諸島のバナナ、ギリシア神話では柘榴（アッティス）等々である。「ペルヴォント」と「ハンスばか」の場合、プロップが同書で触れている「呪文による誕生」に相当する³⁹⁾。

「異常誕生」に関しては、日本昔話に典型的な「果実からの誕生」に柳田は注目する（『桃太郎の誕生』、一九三二年）。また「笑い」については著書『笑いの本願』（一九四六年）で本格的な考察を展開している。最後に、柳田が「ペルヴォント」と「ハンスばか」に惹かれた最大の要因は「舟への遺棄」である。

2 「舟への遺棄」

「うつぼ舟の王女」論の中で、柳田はこの「古い昔話」のモチーフの一つとして、「うつぼ舟に入れて海に流す」を挙げ、わが国の例を紹介する。

「大隅の正八幡では七歳の王女、父知らぬ児とともにこの中にいれられて、唐から流れ着いたのを神に祭ったという記録⁴⁰⁾もあり、それはまた朝鮮の古代王国の創始者の奇瑞でもあった」。

右の論文の翌年、柳田は『辞書解説原稿』「うつぼ舟」（一九三三年）にこう書き記す。

「日本は島国だけに、この伝説は広く久しく行はれ、又ほ上代の神話の面影をも留めて居る。西洋でも Pantanone の Panonio の話を初めとして、グリム童話の愚者ハンスに至るまで、民間説話のこの項目を取扱ったもの数多い「……」。う

つぼ舟は本来、木を空洞にしたる舟、即ち今日の刳舟・丸舟を意味する日本語であったと思ふが、これが専ら大海を超えて来る神人の物語に伴ふに及んで「……」⁽⁴⁾。

「うつぼ舟」の伝承は、日本が「島国」だけに広く分布し、「上代の神話の面影」を留める「古い昔話」で、しかも西洋ではイタリア（ペンタメローネ）にもドイツ（グリム童話）にも見られるグローバルな「奇蹟譚」であることを確認した柳田は、「うつぼ舟」の「古伝」には「大海を超えて来る神人」の観念が付随している、と指摘する。「流され王」のテーマに強い関心を抱く彼は、折口信夫の「まれびと」の観念にも似た「神人」像を「うつぼ舟」物語の背景に想い描くのである。

「舟への遺棄」のモチーフは、以上見るように、西洋ではバジールの『ペンタメローネ』（ペルヴォント）やグリム童話（「ハンスばか」）に見られ、東洋では「太陽正八幡」や「新羅の狐公」（『辞書解説原稿』「うつぼ舟」）などにも窺われるが、柳田が参照した『ドイツ昔話辞典』には、古い伝承として、旧約聖書やギリシア神話が挙げられている。

『旧約聖書』「出エジプト記」にはこう記されている（以下、新共同訳から要約）。エジプトに寄留していたイスラエル人の人口が増えたため、王（ファラオ）はヘブライ人の男児殺害の命令を下す。レビ人の夫婦に男の子が生まれ、妻はパピルスの籠を用意しナイル河畔の葦の茂みに置く。ファラオの王女が水浴

びに来て、籠を発見、王女が男児を不憫に思っていると、その子の姉が申し出、ヘブライ人の乳母（男児の実母）を紹介し、乳母が育て、成長した男児を王女が引き取ってモーセと名づける（第一・二章）。

アポドロロスの『ギリシア神話』は次のように伝えている（以下、要約）。アルゴス王アクリシオスに、娘から生まれる子が将来、王（祖父）を殺すとの神託が下る。恐れた王は青銅の部屋を造り娘を閉じ込めるが、主神ゼウスが黄金の雨となって屋根を通して娘（ダナエ）の膝に流れ入り男児が生まれる。王は娘を子供とともに箱に入れて海に投じる。箱は島に漂着し、成人した男の子（ペルセウス）は怪物メドゥーサを退治し、海の怪物の犠牲となっていたエティオピアの王女アンドロメダを救う⁽⁴⁾。

幼少の時、ナイル河に遺棄されたイスラエルの宗教的指導者モーセ、同じく幼少の頃、母ダナエと共に箱に入れられエーゲ海に遺棄されたギリシア神話の英雄ペルセウス。彼らは成人の暁、その超人的な活躍によって後に民族や種族や王家の始祖となるのだが、これはまさしく「うつぼ舟」の物語に他ならない。『昔話百科事典』によると、この種の伝承はヨーロッパ、インド、東アジア、近東等に広く分布し、遺棄に用いられた樽、箱、小舟は「ノアの方舟」像とも重なる⁽⁴⁾。

モーセもペルセウスも、柳田のいわゆる「流され王」に属する人物たちだが、島国日本の地理的・歴史的な位相を反映する

「うつぽ舟」物語の主人公は、こうした英雄たちの系譜に遙か極東で繋がっている。国と国、民族と民族を隔てる海は、逆に両者を繋ぐ役割も果たす。「海上の道」は、稲のみならず、異国の王女と文物をも運んでくる。その道を通って、「うつぽ舟」は未知なる世界を引き連れて来るのである。

五 昔話（民話）の比較研究

前述したように（第二章）、柳田が国際連盟の仕事で渡欧した一九二〇年前後、ヨーロッパでは口承文芸学が一齐に花開いた。特にフィンランド学派を基点とする昔話の比較研究には瞠目すべきものがある。A・アールネはその著書『昔話の比較研究』（一九〇八年刊）の中でこう語る。

「昔話研究は、昔話の原型、発生地、発生時期および伝播経路をみいだすことにつきるものではない。（それがすんだのち）はじめて、カールレ・クローンがかつて、おどけた調子でいつていた、（本当の昔話研究がはじまるのだ）」と。（関敬吾訳⁴⁴）

フィンランド学派のいわゆる「地理的・歴史的研究方法」、多くの昔話を蒐集し、空間軸（発生場所／地理）と時間軸（発生時期／歴史）に沿ってそれらを整理し、伝播経路を出来るだけ

精密に辿って行く「移動理論」に触れたあと、アールネは師クローンのコメントを引用しながら言う、それは作業の前段階に過ぎず、「本当の昔話研究」の目標は、その向こう側にある「昔話の内的生命の諸現象」、換言すれば、「民間信仰とか習慣」等、「民族心理学的諸現象」と「諸民族相互の文化的影響」の究明にある、と。⁴⁵

昔話の比較研究が目指すべき方向を語った貴重な言葉である。フィンランド学派に注目する一方で（「フィンランドの学問」⁴⁶）、柳田は当時の西洋の学問の中ではフランスの社会学者レヴィ・ブリエールの「原始心性」などにも着目したが、特にドイツの心理学者ヴィルヘルム・ヴントの『民族心理学』（全十巻）に強い関心を寄せ、その内容を一卷にまとめた『民族心理学原理』（一九二二年刊）の英訳 Elements of Folkpsychology（一九一六年刊）を徹底的に研究して彼自身の口承文芸学の土台としたよう⁴⁸だ。

柳田は「所謂フォオクロアの無意識なる伝承」（『口承文芸史考』⁴⁹）に注目し、「民族心理の痕が際限も無く人の心を引く」（『妹の力』⁵⁰）と語る。そして付言する、「日本人らしさ」のような「無意識伝承」の発見は、「楽しく、又御互ひの向学心を刺戟する」（『昔話覚書』⁵¹）と。

昔話に関して、「到底その伝播の経路が分りそうもない話に、幾つとなき全世界の一致のあること」（『郷土生活の研究法』⁵²）に驚きの目を見張る柳田は、その理由を自問する過程で、民族の

「無意識伝承」、「民族心理学的諸現象」(アールネ)の再発見に
口承文芸学の課題と目標を見出したようだ。

ところで柳田は、スイスの心理学者カール・グスタフ・ユングと奇しくも同年(一八七五)の生まれだが、ユングは、周知のように、個人的な無意識の遙か深層に、人類に普遍的な無意識として「集合的無意識」das kollektive Unbewussteを想定した。彼は言う、「元型 der Archetypus」という概念は集合的無意識に必ずついてまわるものであるが、それは(「こころ」)にはいくつもの特定の型式があるということを意味している。しかもそれらの型式はいつの時代にもどこにでも見出されるのである。」(「集合的無意識の概念」)⁽⁵³⁾

柳田を驚嘆させた昔話の「全世界の一致」の謎は、思うに、この「集合的無意識」と大いに関連しているのではあるまいか。西洋にも東洋にも見られる「うつぼ舟」タイプは、先に見たように、神話・伝承に深く根を下ろした物語で、それは「渡来神」にも似た観念を今日の我々の許にまで運んでくれているかに見える。一言で云えば、「うつぼ舟」は、人類の「集合的無意識」を体現するいわゆる「元型」(アーキタイプ)の一種なのではあるまいか。

ユングは民族学・民俗学を活用して深層心理学を構築した。⁽⁵⁴⁾ それに対して柳田は民族心理の概念を西欧に学びながら民俗学を樹立した。同時代を生きた二人は、洋の東西で、逆方向から、民俗学と心理学が交錯する豊かな領域を開拓したのである。

結語

柳田は晩年こう振り返る。『昔話と文学』が「一国の文学の文字になる以前」を考察したのに対して、『昔話覚書』は「主として二つ以上の懸け離れた民族の間に、どうしてこのような一致または類似があるのかを、考えてみようとした試みのつもりであった。」(『昔話覚書』「改版序」(一九五七年)そのためには多くの本を集めて「綿密に読み比べ」なければならぬのだが、第二次世界大戦の混乱によって、外国書の輸入も止まり、計画を中止してしまった。「実は始めから、これは一人では覚束ない大事業であった」と。⁽⁵⁵⁾

昔話は「二つ以上の懸け離れた民族の間」(洋の東西)で何故に「一致」し「類似」するのか、その謎を解き明かすべく、柳田は昔話の比較研究に着手したが、右の引用文に関して、故野村純一氏はこう語る。『昔話覚書』の場合、柳田自身は直接その種の言葉を用いてはいないが、その目的は明らかに汎人類的に認められる昔話伝承の実態を踏まえた上で、比較話学にもとづく昔話の比較研究という点に狙いがあったと思われる。⁽⁵⁶⁾

洋書文献、例えば独語文献ではボルテ／ポリファカのKHM注解やボルテ／マッケンゼン編『ドイツ昔話辞典』を参照しながら、柳田は昔話の比較研究を進め、その成果を「鳥言葉の昔話」(『昔話と文学』⁽⁵⁷⁾)や「味噌買橋」(『昔話覚書』⁽⁵⁸⁾)と言った論文に

見事に結実させた。本稿で扱った「うつつぼ舟の王女」論も一例に数えられるが、そこには柳田の「気宇の壮大さと構想力の雄大さ」(野村)が十二分に発揮されている。彼はまさしく昔話の比較研究という分野を開拓した先駆者である。

ところで、柳田が参照・活用した『ドイツ昔話辞典』は、残念ながらGの項で頓挫した。それから四十年近くが経過した一九七七年(柳田没後十五年)、その間に発展した様々な学間の成果を踏まえ、世界のグローバル化に対応した『昔話百科事典』EM第一巻がドイツで刊行された。さらに四十年近くを経て、昨二〇一四年、『事典』は、「索引」の巻を残して、全十四巻で完結した。柳田の言う「一人では覚束ない大事業」は、こうして多くの第一線の専門家の知を集めて成し遂げられた。昔話の全世界的な「一致」と「類似」の謎を解明するために不可欠な情報を満載して、それは現在目の前に並んでいる。両大戦間に花咲いた昔話の比較研究の第一の波に続いて、二十一世紀の今日、第二の波が形成されることを柳田はあの世で願っているにちがいない。

付記 最近刊行された拙著『グリム童話と日本昔話—比較民話の世界—』、三弥井書店を参照していただければ幸いである。

註

(1) 柳田のKHM研究に関しては、拙稿「柳田國男とグリム学」

〔現代思想〕総特集「柳田國男」所収)参照

(2) 田中藤司「柳田文庫所蔵読了日記洋書目録・略年表」(『民俗学研究所紀要』第二十二集所収)。

(3) 『定本柳田國男集』別巻第五、筑摩書房、一九七七(初版七一年)、「年譜」

(4) Erstaussgabe KHM, Bd. 1, S. 250-252.

(5) B/P, Bd. 4.

(6) HdM, Bd. 1.

(7) B/P, Bd. 4, S. 193.

(8) HdM, Bd. 1, S. 155.

(9) 兄ヤーコプ・グリム(一七八五—一八六三年)、弟ヴィルヘルム・グリム(一七八六—一八五九年)

(10) Erstaussgabe KHM, Bd. 1, Bd. 2.

(11) BDK KHM.

(12) Reclam KHM, Bd. 3.

(13) a.a.O., S. 293-294, 300-302.

(14) (15) 『柳田國男とヨーロッパ』「その他(フィンランド/ロシア)」五二—五五頁

(16) 柳田文庫所蔵(増補改訂『柳田文庫蔵書目録』)

(17) Anti Arne and Stith Thompson, The Types of the Folktales.

(18) 註(14)参照

(19) 『柳田文庫蔵書目録』参照

(20) B/P, Bd. 4.5.

- (21) 『柳田國男とヨーロッパ』「ドイツ」一三一一七頁
- (22) 同書「序」参照
- (23) 『目小僧その他「物言う魚」(ちくま文庫版6、一九八九年) 四五八頁、『昔話と文学』「うつつほ舟の王女」(同8、一九九〇年) 三五九—三六五頁、『妹の力』「うつつほ舟の話」(同11、一九九〇年) 二二六—二六一頁、『口承文芸史考』五三(同8) 一三七—一三八頁、『定本柳田國男集』第二六卷 一九七七(七〇)年、『辞書解説原稿』二八〇—二八一頁
- (24) 註(4) 参照
- (25) BDK KHM.S.1280.
- (26) B/P.Bd.1.S.485-487.
- (27) 『ペンタメローネ』上、ジャンパテイスタ・バジレ、山洋子/三宅忠明訳、五六—七〇頁
- (28) B/P.Bd.4.S.192-193.
- (29) (30) 註(23) 『昔話と文学』参照
- (31) 註(23) 『妹の力』参照
- (32) 註(23) 『昔話と文学』三三五頁
- (33) 註(17) p.236-237.
- (34) EM.Bd.1(1977).S.1048-1065.(Aussetzung)
- (35) EM.Bd.8(1996).S.700-707.(Lachen)
- (36) 『魔法昔話の研究』ウラジーミル・プロップ、斉藤君子訳、一三四頁
- (37) EM.Bd.3(1981).S.1395-1406.(Empfangnis)
- (38) 註(36) 六五一—七〇頁
- (39) 同書、七〇—七二頁
- (40) 註(23) 『昔話と文学』三六三頁
- (41) 註(23) 「辞書解説原稿」二八〇頁
- (42) 『ギリシア神話』アポロドーロス、高津春繁訳、七九—八二頁
- (43) 註(34) 参照
- (44) (45) 『昔話の比較研究』アンティ・アールネ、関敬吾訳、岩崎美術社、一九八三(六九)年、七二頁
- (46) 註(14) 参照
- (47) 高木昌史「昔話の比較研究」(『民俗学研究所紀要』第三十四集、二〇一〇年三月所収) 四二—四四頁
- (48) 同、四四—四八頁
- (49) 『口承文芸史考』(『柳田國男全集』第十六卷、一九九九年) 五〇—五頁
- (50) 『妹の力』(『柳田國男全集』第十一卷、一九九八年) 二五—九頁
- (51) 『昔話覚書』(『柳田國男全集』第十三卷、一九九八年) 五八—八頁
- (52) 『郷土生活の研究法』(『柳田國男全集』第八卷、一九九八年) 二五—四頁
- (53) C.G.Jung, Der Begriff des kollektiven Unbewußten S.45. 邦訳『元型論』C・G・ユング、林道義訳、一〇頁
- (54) 註(47) 三八—四一頁
- (55) 『昔話覚書』(ちくま文庫版、一九九〇年)、四五—四頁
- (56) 同書、六九—六頁
- (57) 註(23) 『昔話と文学』四三〇—四四〇頁
- (58) 同書、六二—五—六—三二頁

テクニスト／参考文献

- * Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 3Bde., hrsg. von Heitz Rölleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1980. (Reclam KHM)
- * Kinder- und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm, Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837). Herausgegeben von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1985. (BDK KHM)
- * Kinder- und Hausmärchen, Gesammelt durch die Brüder Grimm, Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815, von Heinz Rölleke, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1996. (Erstausgabe KHM)
- * Anti Aarne and Stith Thompson. The Types of the Folktale, Helsinki, 1987 (1961 Second Revision)
- * J. Bolte/G. Polivka, Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Diederichs Verlag, Leipzig, Bd.1, 1913/Bd.2, 1915/Bd.3, 1918/Bd.4, 1930/Bd.5, 1932. (B/P)
- * Handwörterbuch des deutschen Märchens, hrsg. von Johannes Bolte und Lutz Mackensen, Walter de Gruyter Berlin, Bd.1, 1933/Bd.2, 1940. (HdM)
- * Enzyklopädie des Märchens, hrsg. von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1977ff. (EM)
- * C. G. Jung, Der Begriff des kollektiven Unbewußten (1936) (Taschenbuchausgabe in elf Bänden. Archetypen. Hrsg. von Lorenz Jung, 4. Aufl., Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1993) S.45. 邦訳『元型論』C・G・ユング、林道義訳、紀伊國屋書店、一九八二年
- * 『柳田國男全集』全三十二巻(ちくま文庫版)、必要に応じて『定本柳田國男集』(筑摩書房)および『柳田國男全集』(同)から引用する。
- * 『ギリシヤ神話』アポロドーロス、高津春繁訳、岩波文庫、二〇〇九(一九五三)年
- * 『ペンタメローネ』上、ジャンパティスタ・バジレ、杉山洋子／三宅忠明訳、ちくま文庫、二〇〇五年
- * 『昔話の比較研究』アンテイ・アールネ、関敬吾訳、岩崎美術社、一九八三(一九九)年
- * 『魔法昔話の研究』ウラジーミル・プロップ、斉藤君子訳、講談社学術文庫、二〇〇九年
- * 『現代思想』総特集『柳田國男』『遠野物語』以前／以後、青土社、二〇一二年一〇月臨時増刊号
- * 『民俗学研究所紀要』第二十二集別冊、成城大学民俗学研究所、一九九八年三月
- * 増補改訂『柳田文庫蔵書目録』成城大学民俗学研究所、二〇〇三年三月
- * 『柳田國男とヨーロッパ―口承文芸の東西―』、高木昌史編、三交社、二〇〇六年 (たかぎ・まかふみ／成城大学名誉教授)